
だいすき

わたす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
だいすき

【Nコード】
N5037K

【作者名】
わたし

【あらすじ】
とある日の、お互いが大好きな男の子と女の子のお話です。

「ねえ夕君。ここから飛び降りたら、気持ちいいかなあ？」

「・・・・・・・・本気？」

「うん。」

質問に質問で返すことはマナー違反だけど。夕君の声色とか表情とか、本気で私を心配してるみたいだから素直に答えた。そうしたら、夕君がなにか迷い始めた。

夕君はいつも私の意志を尊重してくれてたから、止めるべきか止めないべきか迷っているのだろう。

私の意志を尊重するか、自分の意思を尊重するか。そんな一種のジレンマ。可愛いなあ、夕君。

「・・・・・・・・止めないの？」

可愛いけど、だけど、このままじゃ日が暮れてしまって、このことは有耶無耶になってしまうから聞く。夕君はまた少し迷ってから、

「下まで行って、受け止める。だから一分待ってて。」

と言って。夕君は私たち二人だけが居た屋上から出て行く。カンカン、って慌しい足音が徐々に離れて行っから。ぱちくり、と目を瞬いた。

「・・・・・・・・いーち。にーい。さーん。」

それから、60秒を数え始める。ああ、60秒って意外と長い。そうだ、少し速く数えよう。

・

・

・

「いーじゅいーち、いーじゅにー、いーじゅさん、」

数えながら、フェンスを乗り越える。フェンス越しに見ていた地面よりも近くなった、地面。

夕君はまだ、いない。

「うーじゅよん、うーじゅー、うーじゅろく、」

数えながら、空と地面の境界線を眺める。人工物と自然物とがくつきりと分かれていて、なんか、吸い込まれそうな感覚が私を襲う。

それは多分、そこにある風景が私が昔からずっと好きな、「綺麗」なものだから。

まひろは美意識とかプライドとか、意外と高いんだね。　　つて夕君も言ってた。自分でもそう思う。

だって、私が大好きな夕君は、とっても綺麗で可愛いから。

「じーじゅしーち、じーじゅはーち、じーじゅきゅー……。」

L

もう、ろくじゅうびゅう。

私は綺麗なものが好きで好きだから、綺麗な落下をしよう
 と思って、立ち幅跳びな感じで跳ぶことを思いつく。そして理想は
 スタツとした綺麗な着地だ。絶対無理だけど。

だから夕君に任せよう。夕君の動きは、私の理想の形なのだ。私は落下中だけ考えていればいい。

「ろーくじゅー!」

グツと踏み切って、跳ぶ。まだ夕君は来てないけど、私はやると言ったらやる女だ。それに今、落下中は風を感じることに集中することに決めたのだ。

そんなことを考えてる間にも私は垂直落下。横で一括りにした髪の毛がバサアってなって上へ上がっていった、同様に制服のスカートもバサアってなって上へと上がる。

スカート、邪魔だ。しかも綺麗じゃない。飛び降りたことにちょっと後悔した。綺麗で一杯の思い出に、こんな汚点が残るとは。これは益々夕君に期待することになる。結果よければすべてよし、昔の人はよく言ったものだ。

それから、落下して落下して落下して、とかそんなことはなかった。私が飛び降りたのはたかが4階だったのだ。距離が全然ない。

そうして、風と浮遊感とその他諸々が気持ちいいなあってようやく思い始めたときに、ドスって抱きとめられるような衝撃（結構痛い！）が私の体を包む。跳びながらのお姫様抱っこだ。

上を見上げると夕君の横顔。可愛い。幸せ。どうせならふわって抱きとめてほしかった（だって、痛かった！）けど、夕君、綺麗だから。別にいいか。

「夕君あのね、」

「もう一回、は却下だよ。」

「……………もう一回^{いつか}却下。」

「もう」却下。

「……………」

「……………」

「もう」却下。

・
・
・

しばらく同じようなやり取りを繰り返して、結局折れたのは私だった。私が夕君お手製のケーキの誘惑に勝てるわけがないのだ。

・
・
・

「夕君あのね、次はもつと高いところから飛び降りたい！」

僕が作ったケーキを食べ終えたまひろが、瞳をキラキラと輝かせて言った。

いきなりなにを言い出すんだろうまひろは。諦めたんじゃないのか。というか学校より高いところからなんて、僕の身が持たないだろうに。

「駄目。」

迷う必要もないから即否定して、僕はまだ半分ほど残っている僕の分のケーキを食べる。

まひろはじーつと僕を見て、迷っている。これは………繰り返すつもり、なんだろうな。

「夕君あのね、次はもつと高いところ、まひろ、」

だから僕はまひろの言葉を途中で遮る。本当はそんなことしたくないけど（だって、まひろの声は聞いても聞いても飽きないんだ）、でも、まひろの為だと自分に言い聞かせる。ここで甘やかしては駄目なんだ。

「？なあに、夕君。」

そう。例えまひろが首をこてん、と可愛く傾げたって、僕は負けちゃいけないんだ。だから僕は心を鬼にして、鬼、鬼に……………。

「……………嫌いになるよ？」

あ、間違えた。こんなありえない例え話、まひろは信じない。僕も信じない。

「夕君が私を嫌いになるなんて、ありえないよ？」

うん、僕もそう思う。僕がまひろのことを嫌いになるなんてありえないし、その逆もまた、ありえないんだ。

「うん、ちょっと間違えちゃった。……………傷ついた？」

「……………。」

僕が聞くと、まひろはどこか思案顔。まひろは数秒止まって、そして何か悪戯を思いついたときのような顔をした。

「うん、傷ついた！だからね、だからね、学校の屋上より高いところから飛び降りたい！！」

「……考える。期待に満ちたまひろの瞳を直視しないで考える。甘いものを補給して、また、考える。それから、甘いもの——僕が作ったケーキが目に残った。

あ、これだ。

僕と接触一週間禁止、とか今度の動物園デート中止、とか今から無言パーティー開催ー、とか。そんな僕に実害があるものじゃない、だけどもひろにとっては死活問題なもの。

「一年間、僕の作ったお菓子抜き。って条件なら、いいよ。」

「……！！？……やだっ、やだやだやだやだ！！」

ああ、困った顔も可愛いな。僕はまひろの困り顔に癒されながら、まひろを畳み掛けることにした。

「じゃあ、もう飛び降りたって言ったり計画したり実行したりしない？」

「……………」

「まひろ。返事。」

往生際の悪い。拗ねて僕から目を逸らしたまひろに、僕は少々尖った声色でまひろに返事を請う。

「……………わかった、もうやらない。」

「よく出来ました。」

まひろの綺麗な髪をぐしゃぐしゃにしないように気をつけて、僕はまひろを撫でる。まひろからはさつきまでのブスツとした表情は消えうせていて、幸せ全開！と言った感じの笑みでそれを受け入れてくれる。

ああ、幸せだなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5037k/>

だいすき

2010年10月20日18時43分発行